■キャラクター　ファイル　No.1

モルフィス　:30代男性/宿泊客

本名:モルフィス＝クレイマン

■背景

私は高校の数学教師だ。

正直子供など好きではないし、高校生なんぞになんの興味もないが、
昔から数字やパズルが得意で、他にやりたいこともなかった。

同僚のジェシカ(地理教師)に誘われて、このホテルに宿泊しに来た。
彼女が言うには、このホテルには多額の隠し財産があり、今回の宿泊中に
それを探し出したいと打ち明けてきたのだ。

それは開かずの部屋と呼ばれ、常に施錠された部屋の中にある
らしいのだが、それを開くためには四桁の暗号を解読しなくてはならない。

そこで数学とパズルの知識に長けた私を頼ってきた…という流れなんだが・・
ほんとうかなあ?

そんなものはただの口実で…俺に気があるだけ…　なんじゃないだろうか。

一時期、悪い仲間とつるんでいた時期もあって、破天荒な人生を歩んできた。
麻薬を売買して、多額の借金を背負ったこともある。

おかげで女性関係もロクな出会いなど無かったが、ジェシカは若くて魅力的な存在だ。
なんとか彼女を自分のモノとしたい。

今回の宿泊は絶好のチャンスだ。
方法など…選ぶつもりはない。

あなたのパワーポイント
8

※パワーポイントは、目的の証拠を手に入れる
ために必要になる可能性があります。

※このパワーポイントは各自で管理してください。

■事件のファイル

　私はジェシカと共に、まだ日の明るいうちにホテルにチェックインした。
表向きは、高校の林間学校の事前調査という事にしているが、こんな小さなホテルじゃあ、
1クラスの半分も泊まれないだろう。
　チェックイン時には、キャシーと名札を付けた女性が受付をしてくれる。
金髪でロングヘアのとても可愛らしい女性だ。

■19:00　(11月1日)
　ジェシカと共にディナーをとる為、大広間にやってきた。
テーブルには私たちの人数分の食器が並べられていた。察するに、今夜の宿泊客は四人しか居ないらしい。

　私たち二人以外に、50代の男性が既に席についている。
　食事の給仕は支配人のジャックと、キャシーが交代で行うようだ。

　私はビール、彼女は赤ワインを注文し、乾杯した。
　だがジェシカはどうも落ち着かない様子。秘密の財宝がそんなに気になるのだろうか。
これはチャンスだと思った。　彼女が席を立った瞬間を狙い、彼女が飲んでいた赤ワインのグラスに、セロハンの袋に入れておいた薬の中身をさらりと入れた。

　これはいわゆる麻薬というやつで、飲み込んで接種した場合2～3時間ほどで効果が現れる。
とても気持ちのよくなる魔法の薬だ。これで夜は強引にでも彼女をモノにできる…

■20:00
　ジェシカが気分が悪いと言って席をたった。
薬の効果が効き始めるにはちょっと早いが、もしかしたらお酒の相乗効果もあるのかもしれない。
　彼女を追いかけようとも思ったが、となりの席にいた男性…ハリーと名乗る客に声を掛けられた。
なんとなく話を聞いているうちに、彼の魅力的な話術に引き込まれ、酒が進んだ。

■20:30
　料理のメインディッシュを、若いシェフが自ら運んできた。
彼はロンと名乗ったか…。お酒に夢中であまり覚えていない。

■20:50
　空いている席に、中年女性がやってきた。ずいぶん遅い時間にチェックインしたものだ。
ハリーと二人であの女性は一体どんな人物なのか…なんて他愛のない会話をする。
30分くらいで彼女は食事を終え、早々に自室に引き上げていった。

■22:40
　いつの間にか大広間のテーブルにうっつぶして寝てしまっていたらしい。
キャシーにふと起こされた。どうやらお開きの時間らしい。ハリーは15分前に自分の部屋に戻ったと聞かされた。

■22:45
　自室の隣…ジェシカの部屋(2号室)をノックした。薬が効いていれば…彼女は今とてもハイな気分でいるはずだ。ちょっと言い寄ればいくらでも…

　しかし、彼女がドアを開けると…私は思わずスットンキョンな声をあげてしまった。
彼女の姿が…さっきまで大広間にいた、キャシーに見えたのだ。

　私の声を聞いたのだろう、3号室から中年の女性が顔をだした。
「一体どうされたんですか?」

問いただされて、私はあわててジェシカの部屋の扉を閉めた。
「いや、同僚と仕事の話をしていて…ちょっと驚いただけなんだ。気にしないでくれ。」

そそくさと言い逃れし、私は自分の部屋に入った。

■23:20
　寝る前にお風呂に入ろうとしたが、シャンプーが切れていた。
確か、サニタリールームに置いてあったはず…　そう思って廊下に出た時、照明が一瞬落ちる。

　足元が見えなくなって一瞬ふらつくが、電気はすぐに復帰した。　なんだろう?
奮発して今日の為に用意したブランド物のスーツがヨレヨレだ。

■23:50～
　予想以上に酒が回っていたのだろう。
ベッドに入ると私はまたすぐに眠ってしまった。

■6:00(11月2日)～
　少し早めに起床する。
窓から外は真っ白な濃霧につつまれて、景色が良く見えない。だがそれが神秘的でいいのだろう。
まあ、私にはよく分からないけれども…

朝食には早いけれども…なんとなく一階に降りてみる。　そしてその時…

「きゃあ!」

突然　女性の叫び声が響きわたった。

■モルフィスの情報
①ハリーとの会話
　ハリーは話のうまい奴だ。彼の話はとても引き込まれる。
最初は、彼自身の身の上話からはじまった。彼は昔奥さんと娘さんが居たけれど、仕事が忙しくて
離婚してしまった…なんて話してたかな。でもなんの仕事してたかは教えてくれないんだ。

　それから、今度は私にいろいろ聞いてきた。私の職業について…　私の"連れ"について…
そういえば、ジェシカについて随分いろいろ聞いて来たなあ。『はじめは恋人かと思った』…だなんて
嬉しい事言ってくれる。まあ…実際は違うんだけど、このホテルを出るころにはそうなってるさ。

②麻薬に対する知識
　注射した場合は即効の効果があるが、飲んだ場合は2～3時間後に効果があらわれる。
　幻覚/幻聴がみえ、気分がとても高揚する。　※6時間くらいで効果は完全に消える。

③麻薬の入手先
　昔つきあいのあったマフィア(ノース・カポファミリー)の幹部から購入した物。
自分自身も手を出した事はあったが、ジャンキーになる事を恐れ辞めてしまっている。
　以来マフィアとのつきあいはないが、もし自分自身が麻薬所持で捕まるような事が
あれば、彼らも黙ってはいないだろう。

■あなたの目的
ジェシカを無理やり自分のものにする作戦は失敗したが、頼りになる所をみせてもう一度アタックしよう。

第1目標 勝ち点6	事件の真犯人を拘束しよう。

※最終投票で犯人を拘束する。

第2目標 勝ち点3	このホテルの【隠し財産】を手に入れよう。

※エンディング時に、アイテム【隠し財産】を持っている。

第3目標 勝ち点1	自分が麻薬を所持していた事を隠し通す。

※麻薬を所持していた事実を全体公開されない。

■あなたの初期所持品　(自室に置いてある物)
① 白い粉の入った小瓶　…麻薬の入った小瓶
　特定の人間がこの小瓶を見たら、これの正体がバレてしまうかもしれない。
② 数学の参考書　…ローマ数字とアラビア数字について。
　ローマ数字とは I…1　V…5　X…10　L…50　C…100　D…500　を基本とした表記法
③ 数学の参考書　…図形と空間理論
　アルゴ理論を用いた空間パズルの問題集
④ 注射器　…麻薬を直接注入する際にし使用する器具

■あなたの固有アクション　(探索フェーズで使用可能)

●麻薬の投与

アイテム【白い粉の入った小瓶】【注射器】を所持した状態で使用可能。

●効果…次のターンで指定した人物を(1ターン)行動不能にする。
※このアクションを使用後、【注射器】のカードは消失します。

※この固有アクションは探索フェーズで「固有アクション使用」と宣言をする事で使用できます。
固有アクションの内容を周囲に言う必要はありません。

※このアクションはフェーズを超えても有効となります。
探索第2フェーズの最後で使用した場合、探索第3フェーズで効果を発揮します。

※対象が行動不能でも、強奪・身体検査の判定は通常通り行われます。
(行動不能=無抵抗なわけではない。)

このアクションを使用された対象は、次のターンで「背後からちくっと痛みがあり、その後高揚感に見舞われた」とだけ宣言され、行動できなくなります。

■プレイのワンポイントアドバイス
アリバイが強いため、犯人への疑惑は疑われにくい。
そのため推理の主導権を握りやすい。ひとつひとつ真実を導いていこう。

麻薬のはいった小瓶は、警察官など特定の人間が見たらバレてしまう。
注射器はかなり致命的だろう。出来るだけ早急に処分してしまいたい。

もし誰かに取られたら、うそをついてでも早々に取り返したい。